

## 韓国の近代文学に及ぼした国木田独歩の影響（ⅢⅢ） 李光洙の場合

著者	丁 貴連
雑誌名	文学研究論集
号	12
ページ	185(66)-206(45)
発行年	1995-03-20
その他のタイトル	The Infulence of Kunikida doppo on Korean Literature in the 1910's (ⅢⅢ) A Study of Lee Kwang-soo
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/14182">http://hdl.handle.net/2241/14182</a>

## 韓国の近代文学に及ぼした国木田独歩の影響（Ⅲ）

### ——李光洙の場合——

丁 貴 連

#### 一、はじめに

韓国の近代文学者の中で、最も早く国木田独歩に言及したのは、李光洙である。一九一九年韓国で最初に発刊された文芸雑誌『創造』は、その創刊号の冒頭で独歩を日本の自然主義作家として紹介した。<sup>(1)</sup> こうした事情から、『創造』同人として参加した初期文学者たちは独歩に対して高い関心を払うようになったが、その中でも李光洙は、それより早い時期に独歩の作品を読み、影響を受けていたと考えられる。たとえば、それよりずっと以前に、日本に留学した彼は、明治学院中等部に学んでいた一九一〇年一月三日記載の日記の中で、独歩の文章の一部を韓国語に翻訳している。<sup>(2)</sup> その文章は、これまで波田野節子氏をはじめとして、これを出典不明として扱っていたが、筆者の調査によれば、「一句一節一章録」の中の一節（十一月八日条）である。抜き書きされた一節の原文は次のようなものであった。

熱沙漠々のサハラを旅する人も節々は甘き泉湧き涼しき木蔭青きオーシスに出遭ひて死ぬ計りなる疲を休むる由あれど人生まれ落ちて死の墓に至るまでの旅路には唯一度戀てふ眞清水を掬み得て暫時は永久の天を夢むと雖も忽ち醒めて又其淋しき行程に上がらざるを得ず斯くて墓の暗き内に達するまで第二のオーシスに出逢ふことなく、ただ空しく地平線下に沈み了せぬ彼の眞清水を懷ふのみ、果敢なきものならずや。<sup>(4)</sup>

独歩の李光洙への影響については、一九六四年金松峴氏が「初期小説の源泉探求」<sup>(5)</sup>の中で、李光洙の『少年の悲哀』

と独歩の『少年の悲哀』との間には、題材上の一致があると指摘して以来、その影響関係が注目されている。一九六八年、宋百憲氏は「春園の『少年の悲哀』研究」<sup>(6)</sup>においても、李光洙の『少年の悲哀』が、主題・構成・プロット・表現において、独歩の『少年の悲哀』の影響を受けていると指摘している。そして八重樫愛子氏は「韓国近代小説と国木田独歩」<sup>(7)</sup>の中で、李光洙は『少年の悲哀』を執筆する際に、独歩の『少年の悲哀』をはじめ『馬上の友』や『画の悲しみ』の影響を受けていたのではないかと述べている。しかし彼らは、具体的には踏み込んでその影響関係を実証していない。このように、独歩から李光洙への影響関係を扱った研究はまったくないわけではないが、その多くは、具体的な作品の比較研究を行っているのではなく、作家の周辺の外証的事実によって影響関係を云々するという傾向にある<sup>(8)</sup>。

しかし、李光洙は日本の留学時代を回想するときに、必ずといってよいほど独歩の作品を耽読したと語っている。この点をもっと注意してよいのではなからうか。<sup>(9)</sup>それほどに独歩に深い愛着を示していたことを考慮するならば、独歩文学が彼に与えた影響は決して過小評価されるべきではない。とくに、当時、金東仁をはじめとする韓国の初期近代作家のほとんどが明らかに独歩の影響を受けていながらも、その事実を意識的に隠そうとしていたのとは違って、李光洙は独歩の作品を愛読したと様々な場所で述べている<sup>(10)</sup>。それにとどまらず、李光洙は冒頭に引用したように、独歩の作品集にも収録されていないような文章の一部を翻訳して日記に書いておく等、当時としては大胆ともいえるほど独歩からの影響をはっきり語っている。こうした独歩に関する李光洙の姿勢からみて、彼の文学的出発ばかりでなく、その成長も独歩文学とのかかわりの中で行われていたことと考えてよいのではなからうか。

実際、李光洙の初期の作品には、すでに独歩からの影響関係が指摘されている『少年の悲哀』のほかにも、『幼き友へ』<sup>(11)</sup>（一九一七年十一月）、『献身者』<sup>(12)</sup>（一九一〇年八月）『余の自覚せる人生』<sup>(13)</sup>（一九一〇年八月）といった作品にも独歩との関係が認められる。たとえば、初期創作時代の最後の論説文である『余の自覚せる人生』の中に表われている人生観および宇宙観は、独歩の『牛肉と馬鈴薯』、『神の子』、『悪魔』などの一連の思想小説の作品世界に一貫して表われる「天地生存の感」の思想と相通するものがある。すなわち、時間的・空間的に無限な宇宙と有限な人生との対比を通して、人生の有限性と無限性を自覚し、無限無窮なる宇宙にくらべて有限な人生でも、生命の存在するかぎり、生きていかねばならないという「生存欲」（実存）の問題を追求している点において国木田独歩の基本思想と類似している<sup>(14)</sup>。

また、同年に書かれた『献身者』は、独歩の『日の出』を思わせるような内容、すなわち、主人公が貧しい庶民出身で

ありながら金をもうけて、小学校を建て教育事業に献身するという点が類似している。そして、書簡体小説『幼き友へ』は、愛し合っていた女性から一方的に交際を断れた主人公が、失恋の果てに大陸を放浪し、様々な紆余曲折を経た後、昔の恋人と再会するという内容になっているが、これは独歩の書簡体小説『おとづれ』の主人公が、失恋の痛手を癒すために外国へ行って、一年後、帰国して昔の恋人と再会する場面との類似性が指摘できる。こうしてみると、李光洙の初期の作品のほとんどが、独歩文学の影響下に創作されたと考えられる。

本稿は、こうした李光洙の初期作品に及ぼした独歩の影響を明らかにしながら、彼の文学における出発と成長の軌跡をたどろうとするものである。前稿の「韓国の近代文学に現われた国木田独歩の影響Ⅱ―書簡体小説と枠小説における形式の影響をめぐって」<sup>(13)</sup>と「李光洙の初期書簡体小説の中に現われた国木田独歩の影響―『幼き友へ』と『おとづれ』を中心に」<sup>(14)</sup>において筆者は、李光洙の初期書簡体小説にみられる独歩の影響を考察し、そこから韓国における書簡体という叙述形式の発想が独歩の一連の書簡体小説から来ていることを明らかにした。

本稿は、その二編の論考のもつ課題をさらに展開し深化させるために、視座を李光洙の『献身者』と『少年の悲哀』という二編の初期短編小説にしぼり、それを独歩の作品と比較、分析することを通して、韓国の近代文学に及ぼした、独歩の影響を実証していくことにする。

## 二、『日の出』と『献身者』の影響関係

李光洙の処女小説は、一九〇九年十二月、明治学院中等部の回覧雑誌『白金学報』に日本語で発表された『愛か』<sup>(15)</sup>である。かれは引き続いて、翌一九一〇年に『幼き犠牲』、『無情』、『献身者』の三つの短編と『余の自覚せる人生』をはじめとする七つの論説文を発表するなど、旺盛な創作活動を行っている。その後、一九一五年までの四年間は、韓国に帰り、五山学校での教師生活や結婚などのために創作活動を中断している。したがって、『献身者』は初期創作期の最後の短編小説ということになる。この作品は一九一〇年八月に執筆され、『少年』第三卷第八号に発表された。これは、李光洙が中学卒業後、故郷の五山学校の教師として赴任した直後に、その学校の設立者を題材として書かれたものとされているが、この小説には以下のような点において国木田独歩の『日の出』(『教育界』明治三十六年)の発想、題材、形式を想起させる

ようなところがある。

まず両者の間には、題材の一致が認められる。『献身者』は、金光浩という人物が、貧しい賤民出身でありながら真の人間性を持ち、金をもうけて学校を建て教育事業に献身するという話で、その一部始終が学校の若い教師である〈私〉の視点を通して語られる。一方、『日の出』は、自殺を思いとどまった池上権蔵という人物が、その後は氣力をとりもどして働き、金をもうけ、ついに小学校を建設して教育事業に献身するという話で、その学校の卒業生である〈僕〉の視点を通して主人公の生き方が語られる。このように、プロットといい、またそれぞれの語り手といい、両者の間には明らかに共通性が認められるとみてよからう。

次に、小説形式の類似が見られる。『日の出』は兒玉信吾という一人称の語り手が、学校の創立者である池上権蔵という人物の身の上話をするといった形式をとっている。一方、『献身者』は漁翁という一人称の語り手が、学校の設立者である金光浩という人物の身の上話を語るといった形式である。要するに、〈僕〉ないしは〈私〉という語り手が、過去に知り合った一人の男の身の上やその人物との交流を語るといふ、その形式において共通している。

ところが、この形式、すなわち〈私〉という語り手が作品の内部に登場して主人公の身の上を語るといふ叙述形式は、一九二〇年代の韓国短編小説ではよく見られるが、『献身者』以前の韓国の古典小説や新小説などには見られない新しい叙述形式であった<sup>17</sup>。このことについてはすでに朱鍾演氏が

『献身者』は表面的には三人称の叙述様式をとっているように思われるが、よくみると、〈私〉という言述主体によって〈彼〉といわれる一人の人物について叙述する形式をとっていることがわかる。(中略)これは西欧文学理論の視点論(Point of view)でいえば、一人称観察者叙述型(First person observer narration)にあたるもので、言述主体である〈私〉の自伝的な事件や告白的な話をするというよりも〈私〉は第三者としての観察者であり、報告者の立場にとどまっている。(中略)一九一〇年に『献身者』が発表されたことを考えると、この作品は小説の叙述様式として確かに新しい試みであり、驚異である。<sup>18</sup>

と論じている。このように、韓国の近代文学における一人称観察者視点は、一九一〇年李光洙の『献身者』によって初めて試みられた叙述形式である。李光洙は『献身者』を執筆する以前にすでに『幼き犠牲』、『無情』、それに日本語作品で

ある『愛か』の三つの短編を発表しているが、これらはすべて三人称視点で書かれている。しかもそれら三作は、いわゆる近代的な客観叙述による描写ではなく、あくまでも全知的で主観的な視点で叙述されている。したがって、それら三作はまだ新小説的な叙述形式から完全に脱皮しているわけではなかった。しかし、同年に執筆された『献身者』においては叙述形式に変化があらわれている。具体的にいえば、『献身者』は「私」という一人称の語り手を設定し、その視点を通して「彼」という一人の人物について語る形式をとっている。

ここは平安道のある地方の私立学校の事務室である。東向きのオンドル部屋に若い学生六、七人が五十ぐらいの老人を取り囲んで座っている。老人は重病らしい。(中略)「日本でも中学校の卒業式に礼服を着るんですか。」横になっていた老人は、ちよんどはいってくる若い教師を見て、こう聞いた。「礼服ですか・・・洋服のことをおっしゃってるのですか？」(中略)

私はこの人の歴史について語るのがとても好きです。私がこう言くと、読者諸氏は私が彼の親戚だとか、心や主義が同じ者だとかなどと考えるかもしれませんが、私が彼を知ったのは昨年なのです。(傍線筆者)

このように、最初は、語り手がわからない三人称視点の叙述ではじまりながら、やがて途中から「私」という視点がある。観察者であり、報告者の立場にとどまる一人称観察者視点の立場を守っていく。

こうした珍しい手法は、いうまでもなく李光洙が独自に作った叙述形式というよりも、むしろ外国文学から援用したり模倣したりした可能性が高いと考えられる。当時の韓国の社会状況や翻訳事情を考えると、日本文学からの影響と見るのが妥当であろう。<sup>(20)</sup>なぜなら、明治二十年代から三十年代にかけて、日本の文壇には「自分」(私、僕)という語り手を通してみずからの体験を語るといって一人称小説が多く現れるようになるが、これはいうまでもなく、二葉亭四迷訳『あひびき』の語りの文体の影響によるもので、独歩をはじめ多くの作家がその影響を受けているが、「おそろく独歩ほど、この形式と体質が合った作家はいなかった」といわれるくらい独歩の作品には作中に語り手を設定したものが多<sup>(21)</sup>い。しかも、その語り手にもいろいろの種類がある。独歩研究家である山田博光氏によれば、

「画の悲しみ」「山の力」「正直者」などは自らの体験や身の上を語る形式をとっている。「運命論者」「女難」などは一人称の聞き手を設定し、その聞き手に対して話し手が自分の身の上を語る形式をとっている。「少年の悲哀」「非凡なる凡人」などは「春の鳥」と同じく話し手が過去に知り合った人物の身の上を語る形式をとっている。「馬上の友」は、以上にあげた三つの形式を組み合わせている。すなわち、<sup>(23)</sup>聞き手を設定し、話し手が自らの少年時代を語るとともに、その時代に知り合った人物の身の上、その人との交流をも語る形式である。

ということである。李光洙が山田氏の挙げるような独歩の作品を読み、そこで試みられている叙述形式に興味を持っていたという事実は、かれの作品『日の出』の書きだしを読むことによって裏づけられる。

某法学洋行の送別会が芝山内の紅葉館に開かれ、会の散じたのは夜の八時頃でもあらうか。其崩が七八名、京橋区彌左衛門町の同好俱樂部に落ち合つたことがある。(中略)

「貴殿は何処のご出身ですか。」と突然高等商業出身の某、今は或会社に出て重役の覺目出度き一人の男が小介川文学士の隣に座つてゐる新來の客に問ひかけた。(中略)

「僕ですか、僕は」(中略)「僕の出た学校をお尋ねになるのですか。」(中略)

僕は大島小学校の出身なることを、諸君の如き立派な肩書きを持て居られる中で公言して少しも恥ず、寧ろ誇つて吹聴したくなるのです。(中略) 僕の十二の時です。(傍線筆者)

ここでは、まず、三人称叙述で語り手の存在が作品の外部に位置するかたちで始まりながら、途中で「僕」という人物が作品の内部に登場してから、ようやく一人称叙述の語り手の存在と位置が作品内に確認されるのである。しかも、作品の冒頭において、『日の出』はまず、場面の雰囲気と状況を説明したあと、そこに集まっていた仲間の一人と「僕」の会話を記すことで「僕」を焦点化し、そうしてからおもむろに「僕」がある人物の身の上を語り始めるという形式となっている。それと比べて、『献身者』の構成を追っていくと、やはり簡単ではあるが、まず、場面の雰囲気が描写され、その後、ある人と「私」の会話のやりとりが続いたあと、焦点化された「私」が男の身の上を語り始めるという形式になっている。このように小説の冒頭部を比較して読んでみると、両者の形式に共通するものを感じとることができるであらう。

以上のような叙述形式の共通性とともに、独歩の『日の出』の影響が感じられるのは、主人公の人物像の共通性である。

『献身者』は、李昇薫<sup>25</sup>という実在人物の話を金光洙が筆記した記録といわれている。作品の末尾にも「これは事実です。ただし、人名は変名。これは長編にすべき材料でしたが、非才ゆえにつまらない短編にしてしまったために主人公の人格が不完全になってしまったろうことは疑いありません。この点御許しを乞う次第です。」<sup>26</sup>と付記しているように、実話をそのまま書き写したもののようである。しかし、金光洙という主人公が、貧しいながらも一生懸命働き、学校を建てて教育事業に献身するようになった人物として描かれている点では、『日の出』の主人公池上権蔵を思わせるものがある。たとえば、二人とも貧しい出身でありながら財産を築いた後、あるきっかけで教育事業に専念するようになるのである。

『献身者』の主人公像からみてみよう。賤民の身に生まれ、商店の小僧から身を起こし、大商人になった金光洙は、

徒手空拳でここまで来られたその奮闘こそ敬服するところではないでしょうか。もし将来彼に対して何か特筆する経歴がないかと言われた時、これだけでも十分立派で美しい経歴だと言えますし、また模範にすべき事だと言えますけれど、彼にはこれより何倍も大きい、驚くほど美しい、不朽の経歴があります。(中略)私が言おうとする彼の歴史の大部分はこれにかかっております。(傍線筆者)

と、前置きされてから次のように語られる。

その日はその学校の記念式かなにかと言うので、ある紳士が大演説をしていましたが、元来鋭敏な彼は演説を聞いて大きく刺激され、感動しました。(中略)村に小さな校舎を新しく建てて四五人の児童を集めて学校を始めました。これが、すなわち彼が教育事業に献身した始まりです。<sup>27</sup>

つまり、主人公の金光洙はある日、外出したところで、ふとある紳士の演説を聞いたことがきっかけとなって、「驚くほど美しい事」をはじめたのである。

一方、『日の出』の池上権蔵は、放蕩に身をもちくずして、親譲りの田地をなくし、家屋敷まで人手に渡りかけたこと



に絶望して、自殺しかけたのだが、大島という老人に「日の出を見ろ」と諭されたことがきっかけとなった。その後は一生懸命に働き、ついには村内でも屈指の富裕な百姓となった。だが、かれはそれに満足せず、病床の大島老人に最後の教訓を求める。すると老人は、「お前さんは日の出の盛んな処を見て、元氣よく働いたのは宣しい、これからは、其美しい処を見て、美しい働きをも為るが可からう。美しい事を。」<sup>(29)</sup>という。大島老人の謎めいた教訓を聞いた主人公は、老人の意味するところを懸命に考える。

押まれるほどの美しい事を為るには何を為たら可からうと一心に考へたのです。(中略)「自分は大島先生を拜んでも尚ほ足りない程に思ふ、それならば、大島先生のやうなことを為ればよい。其処で学校を建る決心が彼の心に湧いたのです、諸君は彼の決心の余り露骨で、単純なことを笑はれるかもしれませんが、しかし元来教育のない一個の百姓です、寧ろ其心ばせの真率で無邪気な処を思へば実に美しさを感じるのです。(傍線筆者)<sup>(30)</sup>」

このように、池上権蔵も、大島老人から「押まれるほど美しい事をやりなさい」という教訓を聞いたことがきっかけとなって学校事業を始めることになる。ここで注目してよいのは、両者ともに教育事業を「美しい事」といつていることである。これこそ両者の影響関係をうかがわせる明確な徴証の一つと言えよう。池上権蔵は学校を建てただけではなく「今や郡一の富農となるとともに、ますます元氣で、いろいろの公共事業を起こしている」<sup>(31)</sup>が、それは『献身者』の主人公も同じことで、「他の学校の手助けをしたり、また実業有志としていろいろの社会事業にも参加している」<sup>(32)</sup>。

このようにみえてくると、『献身者』における主人公の人物像は、独歩の『日の出』の主人公池上権蔵の人物像をモデルとして、それを韓国社会に置き換えたものとみてよいであろう。

以上、題材、叙述形式、人物像といった三項目の課題を実証するかたちで、『献身者』における『日の出』の影響を考察してきたが、その結論として次のようにいえようか。すなわち、『献身者』の構想は、独歩の『日の出』の全面的な影響のもとに成立したということである。李光洙は明治学院中等部卒業後、韓国に帰り故郷の五山学校の教師として赴任したとき、自分を招聘してくれた創立者の来歴を知り、日本で耽読していた独歩の作品集の中にある『日の出』の主人公・池上権蔵を思い浮かべた。そのことによって李光洙の創作欲はかきたてられた。その成果が『献身者』であった。

### 三、国木田独歩と李光洙の同名小説『少年の悲哀』をめぐる

李光洙が独歩の作品を相当若い頃から読んでいたことは、回想文や日記に少なからぬ記述がみえることでわかるのだが、具体的にどのような作品を読んでいたかについては、実は明記されていないのである。ただ独歩のいくつかの短編集を耽読したということが断片的に知られるだけである。<sup>(33)</sup> 李光洙の留学の時期および読書歴との重なりからいって、一九〇五年発表の第二作品集『独歩集』と翌一九〇六年の第三作品集『運命』が含まれていたであろうことは十分に考えられる。

独歩は長い間不遇の作家であったが、『独歩集』の出版をきっかけに、彼の作品はようやく文壇に認められるようになり、その翌年に出した『運命』によって作家としての地位を確立した。そして、一九〇八年六月独歩が没する時期の前後、彼の作品は一般の読者層にも受け入れられて、広く読まれる作家になっていた。この一九〇五年から一九一〇年までの時期は、李光洙の第一次留学の時期と重なる。日頃文学作品に親しんでいた彼としては、当然独歩の作品集にも接したのである。「東京に行つてはじめて新文学に接触するようになりました。一番最初に読んだ作品が何であるかはよく覚えていないが、国木田独歩、夏目漱石、バイロン、島崎藤村、田山花袋、トルストイ、木下尚江などのものを読みました。」<sup>(34)</sup>と、回想されているところからすれば、当時の李光洙が『独歩集』や『運命』を読んでいたことはまちがいないであろう。そして、この事実を裏付けるかのように『独歩集』には『少年の悲哀』と『牛肉と馬鈴薯』が、『運命』には『日の出』『悪魔』『画の悲しみ』が収録されている。これらの作品はいずれも李光洙の創作に深い影響を与えていた。

ところで、この二つの作品集には、いわゆる少年物と言われる作品が多い。『少年の悲哀』、『画の悲しみ』、『馬上の友』、『春の鳥』、『非凡なる凡人』、『山の力』、『指輪の罰』の七作もあるが、これに初期の『詩想』、『一少女』、『鹿狩』、『初恋』の四作と、晩年の『泣き笑ひ』一作を加えると、少年物は全部で十二編にも及ぶ。この数は、独歩の全小説の中の、約五分の一を占めている。しかも初期から晩年にわたる全時期に現れているのである。これらの少年物は、作品としても優れたもので、『春の鳥』、『少年の悲哀』などの名作がそろい、独歩の作品の中でも光彩を放っている。それに、独歩が最も充実した活動を行っていた中期に、少年物が目立って多いのだが、偶然にもこの中期の作品が、当時の韓国の留学生たちにもっとも多く読まれていた。<sup>(35)</sup> 親もとを離れて異国の地で一人寂しく暮らしていた多感な十四、五才の少年たちは独歩

の『少年の悲哀』や『春の鳥』、『馬上の友』などの少年物がくり広げる作品世界に自分たちの境遇を重ね合わせ、あたかもそれを追体験するように耽読していたのではなからうか。

とくに、なかば孤児のような境遇にあつて感傷的な中学生生活を送っていた李光洙にとっては、独歩の少年物は自分の少年時代とまったく重ね合わせて読まれたとみてよからう。それゆえに、後年創作の筆をとるようになったとき、そこから多くのヒントを得て、自己の幼少時代を追懐した作品を書くようになったのである。『幼き友へ』（一九一七年）『少年の悲哀』（一九一七年）『彷徨』（一九一六年）『尹光浩』（一九一八年）『金鏡』（一九一五年）などは、独歩文学と重なる。いずれもみずからの少年時代を対象とした作品であつて、李光洙が二五、六才の時、少年時代の孤独な心情を回想的に描いたものである。なかでも、独歩作品と同名小説である『少年の悲哀』は、早い時期から独歩の影響が指摘されてきた<sup>(36)</sup>。確かに両作品は、帰らぬ少年の日々の悲しい経験を回想的に描いている感傷性において共通している。以下、具体的に作品に即して分析していくことにする。

まず、論を進める都合上、李光洙の『少年の悲哀』のあらすじをたどつておこう。十八才の感情的で多血質の文学少年文浩は、従妹の十六才の蘭秀に恋心を寄せる。ところが、蘭秀は親の意見に従つて、ある金持ちの十五才になる智恵遅れの少年と結婚することとなる。文浩は蘭秀の文学的才能を認め、そのまま智恵遅れの少年の妻になることを惜しみ、一緒にソウルへ逃げようと誘うが、唐突な申し出に蘭秀はただ驚くだけで応じない。それから二年後、東京留学から帰つてきた文浩も、その間に結婚して一児の父親になつていた。そして作品の悼尾において文浩は、「もう我々もいつのまにか大人になつてしまつたよ。少年の天国は永遠に過ぎ去つてしまいましたね。」といいながら笑っているが、眼には涙があふれている、という感傷性あふれる描写で結ばれている。

この作品には独歩的なアイデアを念頭におきながら作つたと思われるいくつかの要素がある。まず第一に、作品の題材が少年期の感傷世界であることである。独歩の『少年の悲哀』は、主人公が十二才の時、ある青樓で出会つた若い女の悲しみにうたれたことを、十七年経つた今日でも忘れられないと回想するところから始まる作品であり、一方、李光洙の『少年の悲哀』は、主人公が少年時代、従妹との淡い恋が破れた悲哀を回想するところから始まっている。このように、両作品ともに過ぎ去つた少年の日々の悲しい経験を回想的に描いたという点で共通している。

第二に、悲しい兄弟愛が描かれているという点が注意される。独歩の『少年の悲哀』は、少年の眼から見た漂泊の女の

悲哀であるが、そこには悲しい姉弟愛が潜んでいる。主人公が十二才の時、下男の徳二郎につれられて、ある青樓に行き、そこで可憐な遊女と出会う。遊女は、主人公の少年を自分の弟に似ているといい、両親に死別した後、その弟とは生き別れになっていると語り、自分も近いうちに朝鮮に連れて行かれるので、もうこの世で弟に会えるかどうか分からないといつて泣く。生死も分からないたった一人の肉親である弟の代わりに、せめて弟に似た主人公の少年に一度会いたいと願う薄幸の女の切ないほど悲しい兄弟愛が描かれている。一方、李光洙の『少年の悲哀』では、感受性豊かな少年文浩は、従妹蘭秀を愛しているが、彼女は父母の勧めで、ある智恵遅れの少年と結婚する。封建的な両親のせいで、従妹への思慕を断たれ、文浩は言い表せない悲哀を感じる。しかし、どうすることもできないまま東京へ留学する。美貌と才能のある従妹が智恵遅れの男と結婚することを切なく見送らねばならない文浩の兄妹愛が描かれている。この点に共通性をみてとつてよいであろう。

第三に、両作品ともに作品の中でワーズワースのことを語るくだりがある。独歩の『少年の悲哀』では冒頭部に、主人公をして次のように語らせる。

僕は僕の少年の時代を田舎で過ごしとして呉れた父母の好意を感謝せざるを得ない。若し僕が八才の時父母と共に東京に出て居たらば、僕の今日は余程違つて居ただらうと思ふ。少なくとも僕の智恵は今よりも進んで居た代わりに僕の心はワーズワース一卷より高速にして清新なる詩想を受用し得ることが出来なかつた<sup>(37)</sup>だらうと信ずる。

このように、主人公が田舎で暮らすことによつて、ワーズワース以上に自由な心を持ち得ることができたと自負させている。一方、李光洙の『少年の悲哀』は、文浩が結婚の決まつた従妹に、一緒にソウルへ逃げようと誘うところで、

「このばかり」と言いながらも涙がこぼれそうだった。そして、惜しい詩人がとうとう一人いなくなるのを嘆いた。また、自分が最も好きだった妹を他人に奪われるのが悔しくてたまらなかつた。まるで英国詩人ワーズワースがその妹と一生を共に過ごしたように、自分も蘭秀と一生をとまにおくりたかつた。<sup>(38)</sup>

と、ワーズワース兄弟のように妹と一緒に暮らしたいと願わせている。

このように、両作品ともに文脈の中にワーズワースを引用しているところに類似性を感じられる。ただ独歩の『少年の悲哀』は、冒頭の四行が、『少年の歓喜』が詩であるならば、少年の悲哀もまた詩である。自然の心に宿る歓喜にして若し歌ふべくんば自然の心にさ、やく悲哀も亦歌ふべきであらう」というように「少年」の「悲哀」が、この作品のモチーフであることを明らかにすることからはじまって、そのリフレインをつらねて、作品の主題である人生の別離を少年の眼を通してみつめさせていく。そこには、別れという人生の悲しみを、悠々たる自然と対比させることで、やるせない悲哀を描き出している<sup>(39)</sup>。このモチーフ、主題、構成のいずれの点でもにおいて、この独歩の作品がワーズワースの詩想に導かれて書かれたものであることはすでに周知の事実である。

ところが、李光洙のワーズワースの受容は、その直接的な享受というより、むしろ独歩の『少年の悲哀』に受容されたワーズワースの詩想を間接的に享受したものと見られる。というのは、実際に、この作品の中でワーズワース的な詩想を見いだすことは、主題と関連させて分析しようとすれば、きわめて難しいからである<sup>(40)</sup>。また、ワーズワースとのかかわりを指摘できるのは前掲の一節しかなく、主題との関連などを言及する余地はない。さらに李光洙がこの時期、ワーズワースの思想や自然観の影響を受けていたという外証もまったくない<sup>(41)</sup>。以上のことから考えると、李光洙が直接にワーズワースを受容してその経歴を知ったというよりも、おそらく独歩からの間接的影響を通してワーズワースを知ったというのが実情であろう。

第四に、両作品ともに田舎の叔父の家を小説の場として設定している。李光洙の『少年の悲哀』の舞台は主に蘭秀の家。そこはまた文浩の叔父の家でもあるが、そこで蘭秀の結婚話を中心として物語が展開されていくのである。独歩の場合も主人公が八才から十五才まで田舎の叔父の家で暮らした時の経験が物語の中心をなしている。この場の共通性も無視しがたいであろう。

第五に、小説の結末の共通性があげられる。李光洙の『少年の悲哀』では、愛する従妹蘭秀が智恵遅れの青年と結婚したために、悲しみに耐えられず、文浩は東京へ留学するのだが、その後、かれも結婚し一児の父親となって、留学先から帰ってきたところで、次のような文で結ばれている。

私を迎えてくれる従妹たちのなかに、もう蘭秀の姿はなかった。(中略)三年前の楽しい日々は永遠に消えてしまった。文浩は泣き止まなかった。でも、三年前のように涙がでない。(中略)ああ!もうわたしも大人になりましたね、少年の天国は永遠に過ぎ去ってしまいましたね、と笑いながらも、眼には涙があふれていた。<sup>(42)</sup>

このように、楽しかった少年の日々も、蘭秀との愛が終わったと自覚させられたとき、過ぎ去ってしまった。かくて主人公の心に宿った悲哀の追憶は、甘美な涙とともに思い出されるという結びで幕を閉じている。

一方、独歩の『少年の悲哀』は、主人公が十二才の時、ある青樓で出会った薄幸の女の悲しみに心うたれたことを、十七年経った今日まで、その夜の光景とあわせて忘れられないと語った後、次の文で結ばれている。

今はたゞ其時の僕の心持を思ひ起してさえ堪え難い、深い、静かな、やる瀬のない悲哀を覚えるのである。其後徳二郎は僕の叔父の世話で立派な百姓になり今では二人の兄の父親になつてゐる。流れの女は朝鮮に流れ渡つて後、更に何処の果てに漂泊して其果敢ない生涯を送つて居るやら、それとも既に此世を辞して寧ろ静謐な死の国に赴いたことやら、僕は無論知らないし徳二郎も知らない。<sup>(43)</sup>

主人公も大人になり、徳二郎も結婚して二兄の父親になつてゐるが、忘れられない女との出会いの追憶は、心の中にいつまでも残つてゐるという結びは、李光洙の作品の結末と共通する抒情性を感じられる。

以上、五項目にわたつて李光洙と独歩の同名小説『少年の悲哀』の共通性を考えてきた。その結果としては、李光洙の『少年の悲哀』は、発想、題材、主題、構成、抒情性の質などの点で独歩の同名小説の影響を受けて執筆されたものとみなすことができるようである。しかし、李光洙の『少年の悲哀』には、独歩の他の作品の影響が一部に認められる。最後にその点を考察しておこう。

この時代の独歩の作品に『画の悲しみ』『馬上の友』など少年時代を回想したものが多くことはすでに述べたとおりだが、李光洙の『少年の悲哀』は、これらの作品の影響をも受けている。たとえば、主人公の造型の共通性が認められる。すなわち『画の悲しみ』の中で、主人公の岡本が、

自分は美少年ではあつたが、乱暴な傲慢な、喧嘩好きの少年、おまけに何時も級の一番を占めて居て、試験の時は必ず最優等の成績を得る。<sup>(44)</sup>

と、回想する主人公自身の自画像は、李光洙が『少年の悲哀』の冒頭で、

文浩は、田舎のある中学に通う十八才になる青年であるが、彼はまだ青年と言われるのが嫌で、少年と自称している。彼は感情的で多血質である上、才能ある少年として学校の成績もいつもクラスの一、二等を占めた。<sup>(45)</sup>

と、回想する自画像と相通ずるものがある。さらにまた、独歩の『悪魔』の中における主人公と従妹の君子との関係をたどっていけば、李光洙の『少年の悲哀』の主人公と従妹蘭秀との関係と類似していることが想起される。一例をあげれば、

蘭秀は愛らしくつましい才気ある娘である。その従兄なる文浩は、従妹たちを愛するが、中でも特別に蘭秀が好きだった。(中略) 彼はまだ女子というものを知らなかつた。彼が交際する女子は従妹たちと、四五人の親戚の女の子だけである。(中略) 実妹の芝秀よりも従妹の蘭秀をもっと愛した。<sup>(46)</sup>

と描かれているところは、独歩の『悪魔』の中の次の部分と類似している。

「君子は十六、自分は二十従兄妹同士で仲善で、自分は誰よりも君子が好き、君子も自分が好きであつたらしい。」(中略) 自分は子供の時分から他の腕白仲間と一緒に遊ぶことは余りなかつた。なるべく単独で悪戯が為たかつた。たゞ其中に君子にだけは心置きなく遊ぶことが出来、君子は自分の従妹であるばかりか、時には姉のやうな心持もして、長ずるに従ひ、益々君子と親み、其姿を二三日見ないと、如何も物足す感じて淋しさを覚えたものである。<sup>(47)</sup>

さらに二人の従妹は、それぞれ主人公を愛しながらも、新しい人が現われると、その男に恋心を寄せることにも共通性が

見られる。『悪魔』では、

「君子は初め自分を愛して居たが、然しそれは所謂る従兄妹の恋で言ふに足りない。謙輔が来てから、君子の心は大いに傾き、自分<sup>(48)</sup>は確かに二人の恋の成立べきを思つた。」

というように、従妹君子は、東京から帰省している浅海謙輔に心を寄せていく。一方、李光洙の『少年の悲哀』でも、ある智恵遅れの青年と結婚が決まった蘭秀に対して、文浩はその結婚を反対するが、

「蘭秀はその男に会いたい気持ち<sup>(49)</sup>がまんごらないでもないようだ。(中略)蘭秀は今まで最も好きだった文浩よりも、まだ会ったことのない、その男のことを思うようになった。」

と思うほど、すでに蘭秀の心は、一面識のない婚約者の方に傾いていく。また、従妹が外の男と一緒にいるところを目撃した時、主人公がとった態度にも類似性が感じられる。『悪魔』では、謙輔の出現によって、君子の態度に異変を感じた主人公は、

今までに感じたことのない、うら悲しい懷がして、涙さえ誘ふばかりになつた。今から思ふと、自分<sup>(50)</sup>は其頃、君子を恋ひして居たことが分かるのである。(中略)我知らず深い哀みを感じたか。此悲哀は恋の果敢さの悲哀ではないか。」

と、愛する君子への恋が破れたことに対して深い悲しみを覚えるが、李光洙の『少年の悲哀』も同じく、従妹の結婚のために、その恋が断たれてしまったことに対して言い表せない悲哀を感じる。

文浩は、蘭秀の晴れ着姿と髪型の変つた様子を見た時、言い表せない悲哀と嫌悪を感じた。蘭秀が、昨夜あの男と初夜を過<sup>(51)</sup>したと思うと、悲しみに耐えられず、涙がほおをつたつて流れた。――



このように、両者ともに従妹への恋が断たれた、それぞれの内容は違うにしても、従妹が、最初は主人公を愛していたが、新しい人が現われると同時に、次第にそっちの方へ心が傾き、ついに別の男と結婚する。そういう従妹の姿を、切なく見送らねばならない主人公の悲哀が描かれているところに共通性を感じられるのではなからうか。

以上のようにみでると、李光洙は『少年の悲哀』を書くとき、独歩の『少年の悲哀』だけではなく、彼の一連の少年物の作品からも影響を受けながら、自分の少年時代の経験世界を描いたと思われるのである。しかし、李光洙の『少年の悲哀』をトータルにみると、帰らぬ少年の頃の甘美な悲哀を追懐し、悲しい兄弟愛を語るといった題材と発想、それに抒情性の質において、そしてさらには、ワーズワースを引用していることなどで、独歩文学の中では、明らかに『少年の悲哀』からの影響をより大きく受けた作品と判定してよからう。

#### 四、むすび

以上、『日の出』と『献身者』、そして同名小説『少年の悲哀』の二組の作品の比較と分析を通して李光洙の初期作品に及ぼされた国木田独歩の影響を考察してきたが、その結果として、それぞれの作品は題材、発想、構成、叙述形式、抒情性において国木田独歩の小説の影響を受けていることがわかる。

李光洙における国木田独歩の影響は、たんに一作品と一作品の間の影響という点にとどまらない。彼は独歩の文学から以下のようなものを学んでいた。例えば、『献身者』では、一人称観察者視点という新しい叙述形式を韓国の近代文学において初めて試みたこと、そして『少年の悲哀』では、小説の題材を自分の少年時代の経験世界から取材するという手法を学んだこと。それに独歩の書簡体小説『おとづれ』の影響を受けて韓国最初の書簡体小説『幼き友へ』を執筆したこと、といった点に及んでいたのである。それに、本稿では提起にとどまった初期創作期の最後の論説文『余の自覚せる人生』における人生観や宇宙観などにみられる独歩的生存思想を加えると、李光洙がいかに独歩の作品をよく読み、多くのことを学んでいたかが確認できるのではなからうか。

李光洙の初期文学活動は、外国文学の影響を除いては、その存在が考えられないものである。トルストイ、バイロン、夏目漱石、木下尚江などは、李光洙自身によって繰り返し、その作品名が記述されていて、そこからいろいろと影響関係

がとり沙汰されている。しかし、国木田独歩に関しては、早い時期からその影響は指摘されてはいるものの、具体的な研究としては『少年の悲哀』一作にとどまっており、筆者としては、その研究内容にもうなづけないところがある。<sup>(52)</sup>これには理由がなくもない。というのは、李光洙自身、独歩文学の具体的な作品名にまでは言及しなかったからである。しかしそのような姿勢にもかかわらずも、李光洙が外国文学の影響について語るときには、必ずといっていいほど独歩に触れている。したがって、この事実を考慮するならば、その作品自体にも当然独歩の影響があっても不思議ではないと思うのである。

その意味で、本稿において『少年の悲哀』のほかに、新たに『献身者』に独歩の影響を確認することができたことによって、前稿における『幼き友へ』への独歩の影響の確認と合わせて、『少年の悲哀』以来足踏み状態にあった李光洙と独歩との影響関係を一歩前進させることができたと思う。こうして独歩の影響を受けた初期の作品以後、李光洙の文学活動はそれをどのように吸収しながらなされていったのかという問題の研究は、今後にゆだねられている。

## 注

- (1) 朱耀翰「日本近代詩」(『創造』第一号 一九一九年二月)
- (2) 李光洙「私の少年時代——十八歳少年が東京で書いた日記——」(『李光洙全集』十九卷) 一七頁、隆熙四年一月四日の記事
- (3) 波田野節子「獄中豪傑の世界——李光洙の中学時代の読書歴と日本文学——」(『朝鮮学報』一四三輯、一九九二年四月)
- (4) 国木田独歩「一句一節一章録」の中の十一月八日条の一節。(一九〇八年八月一日『趣味』第三卷八号擴大号『文豪国木田独歩』収録、『国木田独歩全集』九卷) 一一二頁
- (5) 金松峴「初期小説の源泉探求」(『現代文学』一一七号 一九六四年)
- (6) 宋百憲「春園の『少年の悲哀』研究」(『大田工專論文集』第三輯、一九六八年)
- (7) 八重樫愛子「韓国近代小説と国木田独歩」(『建國語文学』十一、十二号、一九八七年四月)
- (8) 尹柄魯「韓国近代文学に及ぼした日本近代文学」(『韓国現代批評文学論』青鹿出版社、一九八四年) 一八八—一九二頁
- 白川豊「韓・日・中国文人の留学体験考——近代文学草創期を中心に——」(『日語日文学研究』第三輯、一九八二年十一月)

- (9) 李光洙が東京留学と関連して言及した文(『李光洙全集』一卷一(二〇巻による)として次のものが挙げられる。  
「東京へ行って初めて新文学に接することになりました。最初何を読んだがよく覚えていないが、国木田独歩などを読みました」  
〔「多難たる半生の途程」〕  
「それは中学に通った時であった。国木田独歩の短編とともに夏目漱石の長編が好きだった」〔「無情を書く時とその後」〕  
「日本人のものでは夏目漱石と国木田独歩の作品ですが、今は夏目のものはそんなに再読したいと思わないが、国木田独歩の芸術だけは、いつも読みたいと思います。」〔「李光洙氏との交談録」〕
- (10) 李光洙が国木田独歩について言及したものは次の通りである(『李光洙全集』一―二〇による)  
「多難たる半生の途程」の中の「文学生活の種」三九一頁、「無情を書く時とその後」四〇〇頁、全集十四巻、「李光洙との交談録」の中の「作品の話」二四八頁、全集二〇巻、「私の少年時代十八才少年が東京で書いた日記」の中の「降熙四年一月四日(火曜)」十七頁、全集十九巻、「私が小説を推薦するならば」四〇〇頁、全集十九巻
- (11) 拙稿「李光洙の初期書簡体小説の中に現れた国木田独歩の影響」―「幼き友へ」と「おとづれ」を中心に(『韓国日語日文学研究』第二四輯、一九九四年六月)「韓国の近代文学の中に現れた国木田独歩の影響Ⅱ―書簡体小説と粹小説における形式の影響をめぐって」(『文学研究論集』筑波大学比較理論文学会十一号、一九九四年三月)、この二つの論文の中で「幼き友へ」が独歩の影響を受けたと初めて指摘した。
- (12) 『余の自覚せる人生』は、李光洙が自分の中学時代の精神遍歴を語ったものとして、この論説文に語られている人生観や宇宙観は、後の李光洙の文学を方向づけてくれる重要な意味を持っている。その意味でも、この論説文の中にあらわれているさまざまな文学的影響を明らかにする必要があるし、その中で特に、独歩文学の影響の定測は今後にゆだねられている。
- (13) 前掲載注11に同じ
- (14) 前掲載注11に同じ
- (15) 李光洙の処女作『愛か』は明治学院中学に在学中、同窓会誌『白金学報』(十九号一九〇九年十二月十五日発行)の中に李寶鏡という名で日本文で書いた短編小説。思春期の青年の孤独と渴望とが描かれている。
- (16) 李光洙は「彼の自叙傳」という作品の中で、五山学校での教員生活と設立者について回想している。(『李光洙全集』第九巻) 三〇六―三二〇頁
- (17) 金允植「李昇薫と五山学校」(『李光洙と彼の時代』ハンギル社、一九八六年)二四八―二五七頁  
Cleath Brooks & Robert Penn Warren 「How Plot Reveals」(『Understanding Fictions』PRENTICE ind. Englewood cliffs, New

Jersey. 一九七一年) 一四八頁

Internal analysis

External observation

of events

of events

Narrator as

1. Main character tells

2. Minor character tells

a character

own story

main character

in story

Narrator not

4. Analytic or omniscient

3. Author tells story as

a character

author tells story

external observer

in story

金永和「金東仁小説の視点」(『韓国の現代小説研究』セムン社、一九九〇年参照) この四つの様式の中で韓国の古典小説で見られないものは2と3の様式である。新小説や一九二〇年代の他の小説でもこのような様式は見あたらない。3の様式は現代小説でも部分的に採用されているだけで、完全にこの形式によって叙述された小説は見られない。しかし、2の形式、すなわち副人物が登場して主人公を観察し、それを語る様式が一九二〇年代の小説でよく見られるようになる。したがって、『献身者』はその先駆的な作品と言える。

(18) 朱鍾演「李光洙の初期短編小説考」(『崔南善と李光洙の文学』セムン社、一九八六年) 一―一二六頁

(19) 李光洙「献身者」(『李光洙全集』一卷) 五三四―五三五頁

(20) 金秉品「一九二〇年代の翻訳文学」(『韓国近代翻訳文学史研究』乙酉文化社、一九八八年) 四一四―四六〇頁参照

李在統「叙述者の役割と叙述類型」(『韓国短編小説の研究』一潮閣、一九七五年) 六〇―九四頁参照、によると、エドカ・アラン・ポーの一連の一人称小説やゲーテの「若きヴェルテルの悩み」などの一人称書簡体小説の翻訳と紹介は一九二〇年代まで待たねばならない。

(21) 滝藤義満「武蔵野」と「源おち」(『国木田独歩』塙書房、一九八六年) 一三二頁

(22) 語り手を設定した小説は次の通りである。

『鹿狩』明三一年、『少年の悲哀』明三五年、『画の悲しみ』明三五年、『酒中日記』明三五年、『日の出』明三六年、『運命論者』明三六年、『馬上の友』明三六年、『非凡なる凡人』明三六年、『女難』明三六年、『正直者』明三六年、『山の力』明三六年、『春の

鳥』明三十七年、『帽』明三十九年、『あの時分』明三十九年、『肱の侮辱』明四〇年、のように初期から晩年までほぼ一貫して一人称小説に関心を示していることがわかる。

(23) 山田博光『春の鳥』（『国木田独歩論考』創世紀、昭和五三）一九八頁

(24) 国木田独歩『日の出』（『国木田独歩全集』三巻）八三、八四、八五、八七頁

(25) 李昇薫（一八六四—一九三〇）は、平安北道出身。もと商人だったが、四十才すぎて、安昌浩の演説に感銘を受け、私財を投げうって一九〇七年、五山学校を設立した。

(26) 李光洙『献身者』（『李光洙全集』一巻）五三八頁

(27) 同前書、五三六頁

(28) 同前書、五三六頁

(29) 国木田独歩『日の出』（『国木田独歩全集』三巻）九二頁

(30) 同前書、九三頁

(31) 同前書、九八頁

(32) 李光洙『献身者』（『李光洙全集』一巻）五三七頁

(33) 李光洙は、他の作家と違い、国木田独歩に関しては作品名を言わずに、ただ短編、あるいは諸短編集を読んだとしか言及していない。

(34) 李光洙『多難たる半生の途程』（『李光洙全集』十四巻）三九一頁

(35) 当時の韓国の留学生はだいたいの小学校を終えただけで、日本に來たので、難しい日本文学を読む能力が充分ではなかった。その能力を磨くために努力をしなければならなかった。読みやすい、わかりやすいうえに親近感のある独歩の一連の少年物は彼らにとつて淋しさを紛らせてくれると同時に日本語の勉強のためにも絶好のテキストになった。したがって、ほとんどの留学生が何らかの形で独歩の少年物の作品を読んでいた。少年物の代表的な作品『春の鳥』が、田榮澤の『天痴？天才？』に影響を及ぼしているのはすでに指摘されている通りである。『少年の悲哀』は、同名小説があるくらいである。また、少年物ではないが、中期の作品として、『女難』と『運命論者』は、金東仁の『ペタラギ』に、『運命論者』は兪鎮午の『馬車』に、『日の出』は李光洙の『献身者』に影響を与えていることからみても、いかに中期の作品が、一九一〇年代の韓国の留学生にたくさん読まれていたかが分かるのである。

(36) 前掲載注五、六に同じ

- (37) 国木田独歩『少年の悲哀』（『国木田独歩全集』二卷）四七五頁
- (38) 李光洙『少年の悲哀』（『李光洙全集』十四卷）十六頁
- (39) 本田浩『作品と解説』（『国木田独歩』清水書院、昭和六一年）一五三頁
- (40) 李光洙の『少年の悲哀』の主題は一般的に二つに考えられている。一つは作品の前半部にあらわれた世界、すなわち文浩が従妹・蘭秀に抱いた恋心であり、もう一つは後半部にあらわれた世界、すなわち封建的な結婚制度に対する反抗と見ることである。その代表的な主題を挙げると、次の通りである。
- ①「少年の悲哀」は、文浩という少年がその従妹である蘭秀に対して抱いた感情を物語ったのである。宋敏縞「春園の初期作品考」（『現代文学』通巻八一号、一九六一年）一三八頁
- ②主人公の少年は従妹蘭秀を心から愛する。しかし、蘭秀は親の言うままに某金持ちの智恵遅れの青年と結婚する。一面識もなしに一生を決める旧制度に対する矛盾を指摘した作品である。つまり、当時の社会慣習に抵抗する主人公の少年の悲哀である。尹弘老（『韓国文学の解釈学的研究』一志社、一九七六年）二〇八頁
- (41) 李光洙がワーズワースについて言及したのは、一九二四年十二月から一九二五年二月まで連載した『朝鮮文壇』における「文学講話」という題で文学論を論じた時、ワーズワースの詩「水仙花」を翻訳してその内容を紹介したのがはじめてである。その後、「秋収軍」という詩をもう一遍訳しているが、これを前後にしてしばらくワーズワースの言及はない。それから二十五年後の一九四八年に『私』という創作自伝の中で、五山学校時代にワーズワースの書物を持っていたと回想しているが、五山時代からすでに四十年という時間も過ぎ、また、他の回想文とあまりにもかけはなれており、むしろワーズワースを読みたかったという希望を語っていると思われる節が見える。（『李光洙全集』一―二十巻参照）また、金秉喆によれば、韓国におけるワーズワースの本格的な翻訳、紹介は一九三〇年代まで待たねばならない。したがって、一九一七年までの李光洙のワーズワースの知識は教科書からのものであるか、あるいは読んでいた西欧文学ないし日本の小説の中からのものだったと思われる。（『韓国近代翻訳文学史研究』乙酉文化社、一九七五年）（『韓国近代西洋文学移入史研究』乙酉文化社、一九八〇年）参照
- (42) 李光洙『少年の悲哀』（『李光洙全集』十四卷）二二頁
- (43) 国木田独歩『少年の悲哀』（『国木田独歩全集』二卷）四八三頁
- (44) 国木田独歩『画の悲しみ』（『国木田独歩全集』二卷）四六五頁
- (45) 李光洙『少年の悲哀』（『李光洙全集』十四卷）十一頁
- (46) 同前書、十一頁

- (47) 国木田独歩『悪魔』(『国木田独歩全集』三卷) 一九六、一九九頁
  - (48) 同前書、二二一頁
  - (49) 李光洙『少年の悲哀』(『李光洙全集』十四卷) 十六頁
  - (50) 国木田独歩『悪魔』(『国木田独歩全集』三卷) 二〇八頁
  - (51) 李光洙『少年の悲哀』(『李光洙全集』十四卷) 二〇頁
  - (52) 例えば、宋百憲氏は「春園の『少年の悲哀』研究」の中で、李光洙の『少年の悲哀』は、主題・構成・表現において独歩の『少年の悲哀』の影響を受けていると指摘している。つまり、氏は両作品の主題を「ワーズワース的な憧憬と浪漫的な悲哀を描いている」点において両者は共通するというのが、本稿の注40にも書いてあるとおり、李光洙の『少年の悲哀』は、あくまでも主人公の少年とその従姉との悲しい離別を、封建的な結婚制度の中であらわした作品である。したがって李光洙の『少年の悲哀』には、独歩の作品のようにワーズワース的な要素は全く見られないので、両者の間の主題の類似性は認められない。
- 本文中に引用した国木田独歩の作品の文は、昭和三九年一月～四二年九月、学習研究社発行の『国木田独歩全集一～十』によった。李光洙の作品の文は、一九六二年四月、三中堂発行『李光洙全集一～二十』から引用した。なお、本文中に引用した韓国関係文献の日本語訳は筆者自身によるものである。